

ゲーテの『詩と真実』について

岩 崎 允 胤

1

ゲーテの世界へとわたくしの眼が大きく開かれたのは、何といっても旧制高校の竹山道雄教授のおかげである。その頃、茅野蕭々ちのしやうしやうの『独逸浪漫主義』などを通してノヴァーリス、グリルパルツェル、クライスト、F・シュレーゲル、ヴァッケンローダーらに近づいていたわたくしであったが、旧制高校二年のドイツ語を担当した竹山教授は、レクラム版のエッカーマン『ゲーテとの対話』Ⅱ、一八二八—一八三二年（Gespräche mit Goethe）をテキストとしてわれわれをゲーテの世界に導き、ときおり「五月の歌」（Majlied）、「トゥーレの王」（Der König in Thule）、「魔王」（Erlkönig）などを黒板に書いて、ゲーテの原詩を鑑賞する手ほどきをしてくれた。それに誘われるようにわたくしは名著といわれる木村謹治あつの分厚い『若きゲーテ研究』を読み、グレートヒェン、ゼーゼンハイムの森とフリードリケの物語り、また、ゲーテのヘルダーとの歴史的な出会い、かれの哲学者スピノザやヤコビーへの傾倒などに、大きな興味をそそられたのだった。

* ゲーテは『詩と真実』のなかでスピノザについて、「わたしのうえに決定的な影響を与え、わたしのあらゆる思想のうえに強大な働きを及ぼした偉人、それはあのスピノザであった」と書き、また、「スピノザといえは、デカルトの学説から出発して、数学と猶太神学とを教養の坂路はなぢにして思想の絶頂を極めた特異の偉人で、かれの達しえたこの絶頂に

は今日でもまだ、あらゆる思索的努力の目標たるべき価値があると思う」（下、四二五、五〇八―九ページ）、と高く評価している。

当時、渋谷・宮益坂を青山の方向にのぼりつめたあたりに、大化書房という開店して間もない瀟洒な書店があった。いまのように何本もの大道があたりこちで交叉し、車がごうごうと音をたてて走りまわるのを高度に文化のだと喜ぶような人は当時はおるはずもなく、かえって、鄙びているとみえるかもしれないが、都電の軌道の敷かれた道は、青山方面の静かな落着いた街並みへと通じていた。宮益坂上に近いあの大化書房で、わたくしは、いま机上に重ねて置いてある金文字で飾られた立派な装幀の『詩と真実』上下二巻（増富平蔵訳——ゲーテのこの著作は全四部二十巻から成る——）を入手したのであった。

当時、青山六丁目あたりから渋谷、原宿、駒場の界限に居住、あるいは通勤・通学していた人々のなかには、この書店をいまも覚えている者もいるだろう。爽やかな感じの若夫婦が経営していて、思想と芸文にかんするわれわれの意欲をそそる新刊を書棚に並べていた。わたくしがこの書店で購入した思い出深い書物といえば、上記の『詩と真実』のほかに、ヴィンケルマンの『希臘芸術模倣論』（沢柳大五郎訳、児島喜久雄後序）を筆頭として、片山敏彦『ロマン・ロラン』、メレシュコフスキー『永遠の伴侶』上下二冊、ボードレール『悪の華』、ジード『地の糧』、その他ランボー、リラダン、ヴェルレーヌらの詩集（もちろん日本語訳）などであった。いまのように、良書がおびただしい雑書のなかに埋没してしまうのではなく、その書店では、興味をそそる知性と情感豊かな書物を容易にみつけることができた。それで、わたくしは、散歩のおりなど、白線帽に高下駄、冬には黒マントをはおって、よくその店に出入りしたものであった——それから大学時代にかけて。不思議とその書店は懐しく、今日になってもときどき思いだす。そして、あの若夫婦は、あの熾烈な無謀な戦争を無事に生き抜いたであろうか、とも。もちろん、わたくしはそう信じたい。なにしろ天皇の召集令状は、

愛しあう人々の間を非情冷酷にも引き裂き、未来に富む若人^{わこうど}を虫虻^{むしけち}同然に侵略戦争の戦場に駆りたてたし、B 29の大空襲は、この青山一帯にも、鬼神をすら哭^なかせる焦熱地獄をまのあたりに現出したのであった。そういう腹立たしく、悲しい、じつに辛い時代であった。——ともあれ、そうしたなかで、あの書店には、わたくしにとって、息のつける、思想と芸文の旅路での一つの未来的な触れ合いがあった。ある日わたくしが『詩と真実』に出会ったのも、その書棚であった（一九三九年のこと）。

2

まえがきが脱線して意外と長くなったが、本稿の主題であるゲーテ『詩と真実——わが生活より——』（*Dichtung und Wahrheit — Aus meinem Leben —*）に入ることにする。わたくしが半世紀も前に読んで深い感銘をうけ、その後いくたびか読み直したいと思いながらその機会を得られなかったこの著作に、いまたち戻ることができるのは嬉しい。その後、小牧健夫、山崎章甫、河原忠彦らの訳が出されたが、わたくしは以下では、主として——文体は古いけれども——かつて読んだ増富平蔵訳（一九二五—六）に基本的に拠り、傍に原文を置いて参照することにする。なお、この著作は、自伝ではあるが、事実の記述と同時にロマンという著者ゲーテの意図もうかがわれ、とくに、グレートヒェン、フリードリケ、ロッテ、リリーとの、あいつぐ愛の物語が、全体の四部二十章のなかにみごとな構成をもって、織りなされている。しかし、わたくしはそれらの愛の物語にたちいるつもりはない。この著作におけるまさに詩と真実にかかわる若干の問題についてののみ、考えてみることにしたい。

* ただし、引用のさい、旧仮名を新仮名になおし、また漢字を平仮名にかえた場合が少なからずある。

このスケールの大きな文学的な自伝では、歴史のなかの時代相、世相、思潮・文化、人々の交流・交往が縫うように描きだされている。「序文」でまず次のようにいう、「自分の内部における心意の動き、外来の影響、理論的または実際的に自分の踏んできた発達の段階について順序正しく物語ろうとしているうちに、自分だけの狭小な私生涯から広い世界へ誘い出され、幾百名という非凡な人物から直接間接の感化を受けたことや、あるいはまた、私のみか同時代のすべての人々のうえに甚大な影響を及ぼした時代の推移、すなわち一般的な政治的時代相と、それに付随したすべての大きな公的運動についても、その一々へ綿密な考察を払わねばならなかった」（上、五ページ）。ひとはだれしも所与の時代のなかで自分の世界観と人間観とを作り出すが、芸術家、詩人、著述家の場合には、さらに、その世界観と人間観をどのように外に向かって映しだしたか、表現しえたかを明らかにするという課題にぶつかる。『詩と真実』は、いま引用したような多面的で緻密な「回想と熟慮」を経て書かれたものであり、ほかならぬ文豪ゲーテの作であるだけに、その内容は無尽蔵というほど豊富である。

ゲーテは「序文」の末尾で、叙述の仕方を「半分は詩、半分は物語といった風の取扱い方」(halb poetische, halb historische Behandlung)として特徴づけ、それ以上のことは本文で「物語」(Erzählung)を進めていく間に「適当な機会に述べるつもりだとしているが、この問題は、著作の標題でもある詩と真実にかかわることなので、本稿はこれを取りあげることからはじめたい。

まず二つのことをわたくしはいいたい。①たしかに異なる原語（ここでは historisch、つまり名詞としては Historie へ、Erzählung と）に同じ訳語「物語」を付けるのは、あまり好ましくもないかもしれないが、② historisch を簡単に（いわば機械的に）「歴史的」と訳すのよりはるかにまさっていると思われる（そういう訳なら英語をちょっと知っていれば、だれだってできる）。ここでは訳者はかれなりの考慮にもとづいてあ

えて「物語といった風の」と読んでいたのである。いうまでもなく、ドイツ語の Historie は古代のギリシア・ラテン語から来ており、ギリシャ語では、*historia* またラテン語では *historia* はまず調査、研究 (inquiry, investigation) の意味をもち、プリニウスの「博物誌」(*historia naturalis*) の場合なども、なんら「歴史」の意味ではなく「誌」、つまり書きとめたもの、記録の意味であり、この語はもちろん歴史にかんすることもありうるが、まずは、歴史にはかぎらない調査、探査、その記録一般を意味する。ラテン系の近代語としてイタリア語では、手持ちの伊独辞典によれば、*storia* は脱落していて、しかも *istoria* = *storia* とあり、*storia* には *Geschichte* (歴史) と *Erzählung* (物語) の訳語が付され、また *storia naturale* は *Naturwissenschaften* (自然諸科学) と訳されている (なお、英語においては *history* と *story* に分かれる)。スペイン語では、*historia* は歴史と物語の両方の意味をもち、*historia de un amor* のときは「ある恋の物語」である。なお、ゲーテと同時代の哲学者ヘーゲルでは、『歴史哲学』を開けばすぐ分かるように、*Geschichte* と *Historie* (*geschichtlich* と *historisch*) とは基本的に峻別され、前者はかれの考える本来の哲学的な歴史を意味するが、後者は知識のたんなる寄せ集めにすぎない (しかも、なにも人間の社会や歴史にかんしてばかりでなく、論理学においてさえもこの語がその意味で使われている)。^{***}

* 平賀源内の『物類品鑑』はその意味での *istoria* による品定めであらう。

* フランス語では *histoire* の綴をもつが、冒頭の *st* は無声となっている。

*** ヘーゲルの『小論理学』は、本論に入る直前の箇所、予備的におこなう論理的概念についての説明や論理学の区分は「この序論全体がそうであるように、先廻りの、記述的 (*historisch*) であるにすぎない」と書いている (『小論理学』岩波文庫、上巻、二四〇ページ)。また、かれの展開する思弁的な論理学から弁証法的なものと理性的なものとの区別を、普通の論理学と同じものになるとし、次のように書いている、「有限であるにもかかわらず無限なものと考えられているさまざまな思维規定を寄せ集めて記録したもの」(*keine Historie von mancherlei zusammengestellten Gedankenbestimmungen*) になつてしまふ (傍点著者、同上書、一五二ページ) 云々。

このようにみると、ゲーテがここでいう *historisch* は、いわゆる歴史にかんするという意味で歴史的というのではなく、むしろ社会の時代的な推移をも当然に含みながらより広く諸事実の「誌的」な記録・記述、そのような物語 (*Erzählung*) を意味するのであろう。いいかえれば、*Geschichte* というよりか、——もちろんこの著作では自然についてではないが——*Bericht, Kunde* の意味であらう (cf. Wahrig, *Deutsches Wörterbuch*)。

* もっとも、右のことを念頭にいたううえで、じっさいに当のゲーテが *historisch* あるいは *Historie* という語を、前後の關係でどういう意味で用いているか、念のためにいちおうさまざまな用法をしらべてみることも必要であらう (むろんそのさい日本語訳をいくら集めてきても問題の解決にはならぬ役立たない)。これは、日頃、ゲーテの原文に親しんでいる者でなくては急にはできないことだろう。

さきに引用した「半分は詩、半分は物語といった風の取扱い方」の句にもどらう。後者、「物語」的というのは、もちろん時代相、その推移をはじめとし、かれ自身の生活と行為の諸事実 (たとえば幼いとき「新パリス」などの物語を案出しては友達に話してきかせた事実など、無数の事実) に及ぶ、おびただしい事実・事柄についての記述と解したい。前者、「詩」的 (*poetisch*) は、*dichterisch* でも意味は通ずるだろうが、南欧から西欧にかけて古代以来使われてきた *poi/nos* (gr.), *poesis* (lat.) の系統の、——そしてアリストテレス、ホラティウス、ロンギノスらの詩論の系譜もある——伝統的な用語の方を、ゲーテは選んだのであろう (*die Poesie betreffend*——ポエジーにかんして——の意味で)。すなわち、ゲーテの著作『詩と真実』の標題におけるまさに「詩」ないし「詩作」(*Dichtung*) にかかわることである。ところで、この著作は全巻散文 (*Prosa*) で書かれており、かれの詩句はごく少く、むしろ、そこには「詩」、いわば詩の心、詩の魂 (*Poesie, Dichtung*) がつまぬかれ溢れているということであらう。同時に、前掲の引用句の後半は、歴史的というよ

りか、物語的＝事実記述的ということの意味するのであろう。そして、著作の標題にいう「真実」とは、たんなる事実そのままの列挙のごときものではなく、事柄の内的真実をこそ指すのであろう。それゆえ『詩と真実』は、自伝として事実をあくまで前提としながらも、想像力・構想力（Phantasie, Einbildungskraft、ときには空想力とも訳される）をとおして、生、とくに詩人としての、人間としての生の真実を語る文学作品、いいかえれば詩的精神の所産とみることができさるだろう（真の詩的精神は、事実から遊離するところにあるのではなく、自然と人間の生（生命・生活）を基礎として誕生し、その内的真実とその表現にむかって発展し、高揚するものである）。

3

ところで、宗教はゲーテにおける重要なテーマの一つであるが、ここでは、まず、『詩と真実』第一部、すなわちかれがまだ生地マイン河畔のフランクフルトにいた若い時分にいただいた宗教心、宗教思想を主としてみることにする。

ゲーテによれば、当時少年少女が教わる宗教は教会公認のプロテスタントの教えであったが、その教えは、乾涸びた道徳訓にすぎず、とてもひとの心や魂を動かすに足りるものではなかった。そのため、セパラチスト（分離派）、ポエチスト（敬虔派）など、いろいろな分派がそこから出てきたが、どの分派も、一つの目的、すなわち何ら公開的な宗教に頼らずに、直接にキリストを通じて神に接近しようという目的を共通にもっていた。ゲーテも、牧師や一般の人々が真摯にめいめいの宗教上の意見を自由に交わしていることに鮮明な印象をうけ、自分もなにかそういう宗教心をもちたいと思うようになった。神を創造主とする第一の信仰箇条を手許におきながらかれは書く。「自然と直接の聯絡を保っていて、自然をみずからの造ったもの（被造物）」として認めも

し愛しもしている神、わたしにはそれが真実の神であると考えられた。」「するとまた、この神は他のすべてのものと同様に人間にたいしてもより緊密な関係をもちうるわけであり、人間に対しても星の運動や四季晝夜の交代や動植物やにたいすると同様の配慮をされるにちがいない（と思われた）」（上、六五ページ、引用文中の傍点は著書、また訳文を若干かえた）。つまり、ゲーテの前には、星々が運行し季節が代替し動植物が成育する、生命力・創造力の豊かな大きな自然がひらけており、かれは、この自然をば思考のリアルな拠り所として考える。そして、ほかならぬこの力強い豊饒な自然をば自分の被造物として認め、また愛してもいる存在こそが、真実の神である、と考えたのである。

その後何年か経ってヘブライ語を勉強する過程で、たんに言葉を学ぶだけではまず、旧約聖書の解釈上のいろいろな疑問にぶつかり研究書を読んだ頃のことを振りかえって、ゲーテはパレスチナという美しい尊い土地に思いをよせた様子を次のように書いている。「人間は自分の欲するがままにどんな方向へ転じてゆこうと、またはどんな事へ手を出してみようと、結局はいつでも、自然が一度かれのために劃し定めた範囲へ引き戻される、この場合にもわたしは同様の目に会った。ヘブライ語（の修得）に対する苦勞、聖書の内容の理解にたいする努力も、結局さいごには、あのパレスチナという美しい尊い土地について、その周囲や隣国について、あるいはまた、いろんな国民なり出来事なりが、あの地球上の小斑点とでもいうべき土地を何千万年ものあいだ輝かしい活動の舞台にしたことについて、わたくしの想像力のなかに以前よりもいっそう生きいきとした映像が出てきたということでおわった」（上、一二三ページ、最後のセンテンスは、若干訳語を変えた。）

これは、パレスチナ、すなわち旧約の物語の展開する舞台であったあのカナンの地に、かれ自身が自然によって深く結びつけられていて、いつもそこに、あたかも精神的な故郷であるかのように連れ戻される、ということの述懐である。そしてこれが、かれの精神の深奥にひそむ一つの重要な性向であることを思うと、今世紀に

東洋、その極東という文化的・地理的風土に育つた私たちは、もちろんゲーテとの人間的同一性はもつにしても、かれがそのかぎり、やはり遠い存在として異質的な精神的土壌のなかにいることをあらためて覚えざるをえない。日本にいてはたしてどれほどの人がこのような精神的体験を、生来、してきているだろうか、カトリックの敬虔な家庭の子女はこの点どうなのだろうか。おそらくそうした体験はたいへん乏しいだろう。ともあれ、ここでわたくしは次の二つのことを思う。一つは、われわれはゲーテの詩を読み、小説を読んでも、根底には理解をこえるものがないかあるのではないか（パレスチナはわれわれにとって普通やほかかなり外的な世界である）の思い、もう一つは、いやむしろ、だからこそゲーテに耽（ひた）りてその精神の内面にできるだけ入ってゆこう（パレスチナは、遠いものであるにせよ、できるだけこれを内化したい）という思いである。

* だからして、バイロンも『マンフレッド』で“The Tree of Knowledge is not that of Life”（「知恵の樹」は「生命の樹」ではない）というのである（第一幕、第一場、冒頭のマンフレッドの科白（セリフ）のなかで）。これは、西欧近代の根源にパレスチナ的な思惟がある、ということである——もっとも、右の句は十分に普遍的な真理の一面を語っているけれども。

そのパレスチナについてゲーテは語る。「この小さな土地こそは、人類の起りと成長との揺籃であったといわれている。上古史の最初の唯一の資料はそこから取り出されたのであり、我々の想像力に浮んでいる此の一带の地面は、簡単に解り易いと共に多様であり、最も警異すべき種々の旅行、移住の目的地となったのである。若々しい最初の人間（アダム）にたいしては、その住まいに適した地球上の全地面のなかから、その四つの名高い河流（「ビシオン、ギホン、チグリス、エウフラテス」）に挟まれた、小さい、しかもきわめて秀美な小地面が選び与えられたのであった。かれはここでその最初的能力を発達させ、同時にその全後裔（あとにくる全人類）に分たれることとなる運命に遭遇した、すなわち、認識を求めることによって安らぎを失うという運命に。か

くしてパラダイスは失われたのであった」（上、二二四ページ。最後の箇所、若干訳語をかえた）。

ゲーテは、旧約におけるかれのいう壮大な人類初期の歴史を重厚壮麗な文章で淡々と叙述してゆく。ノアの洪水、そして、チギリスとエウフラテスの二河のほとりから始まる人類の新たな歴史、その始祖アブラハムと美貌の妻、そしてイサクの物語……。ゲーテのこのあたりの想像力豊かな叙述については、私事にわたるが、一九四六年であったか、東大文学部の教室で手塚富雄教授が、静かな発音で読むドイツ語に淀みのないみごとな訳語をつけながら講じていたときのことを想起する。当時のわたくしには、ゲーテがなぜこのような事柄について長い叙述をおこなっているか、その真意がよくわからなかったけれども——。かれにはパレスチナの自然とその生活にたいして深い、愛着にみちた思いがあったのである。

わたくしはここでは、ゲーテの、旧約聖書による壮大な人類史の展開にはたちいらないが、自然宗教と啓示宗教のそれぞれの発生について述べている箇所に注目しておこう。かれが、自然宗教がまず生じそこから啓示宗教が発達してくるのに、パレスチナはもっとも適した土地であったという思想を、味わい深く語っているからである。ゲーテはいう、「はたして（まず）一つの自然的な一般的な宗教が生ずべきものであり、またそのなかから一つの特異な天啓宗教^{啓示}が発達して出るものだとしたなら、われわれがいままで想像のなかへひろげていた（パレスチナの）土地と、そこに住んでいた人種とかれらの生活状態とは、かような天啓宗教の発生なり発達なりにとってもっとも適応したものであった。少くとも、全世界のなかでこれほどに適応した諸条件を具えた土地といつては他になかったことが認められる」（上、二三二ページ）。啓示宗教としてのユダヤ教（そして、キリスト教）は、その教義からいえば、神が自然を、そして万物、したがって人間をも創造したわけであるが、他方、ゲーテから離れて、その宗教のもととの発生を考えれば、イスラエルの地に、人間社会の一定の発展という条件のなかではじめて誕生したはずである。これ、つまり、神が絶対者として自然と社会に先ん

ずること、その宗教思想が社会の一定の発展のもとにはじめて発生したということとは、一つの大きな矛盾であろう。しかし、ゲーテは、神学を真向から掲げて、教義をリジットに展開することなく、反対に、パレスチナにおけるユダヤ教の発生を淡々といわばナチュラルに素直に文学的に語るのである。これはたしかに自由な捉われない考え方を示すものといえるだろう。前述したように、かれのまえには、人間を包む限りなく生成的な広大な自然がリアルに展けていて、これをあたたく抱擁する創造主、神をかれは思うのである。その意味で、かれの自然的肉体のなかに、まで体化された宗教観がいだかれているということができよう。

つづけてかれは書く。「それに、自然宗教は早くよりしておのずと人間の心のなかに現れて出るものだということ

を仮定してみると、それには余程の精緻な気質が必要であった。何となれば、この自然宗教なるものは、世界の全体的進行を導いてゆく一つの一般的な摂理がある、この信念を根底にしたものであるからである。特殊の宗教、すなわち神々に依って或る一つの民族に啓示された宗教は、一つの特殊な摂理を信ぜしめ、この摂理は、神がその殊寵をかけている個人とか宗教とか民族とかに對してのみ行われるものである。かような宗教は、自然宗教と違って人間の内心から自発的に出てくるものとは考えがたい。つまりそれには太古からの伝説や来歴や歴史的実証の証拠が必要である。それ故、イスラエル民族の伝説が、その祖先らをかような摂理の信賴者として語っているのは尤ものことで、それに拠ると、かれら〔祖先ら〕は信仰上の英雄であり、自分らは神という至高者に依属したものであると告白し、したがってそのあらゆる命令にたいしては盲目的の信仰をささげ、神の約束されたことにたいしてはなんらの疑いを挿まないで、少しも倦むところなしにその実現を待ち望んだ」（上、一二三—一二三ページ、傍点筆者）。このような叙述のなかに、われわれは、ゲーテの宗教思想の、ある柔らかさを感じるとともに、しかし同時に、柔らかいにしても、かれの、またヨーロッパの思惟の根底にある宗教観のうちには、東洋の仏教や老莊思想などかなり距たるある別の心があることに、あらため

て気付きもするのである。

4

前項で述べたように、ユダヤ教（そしてキリスト教）では、教義的には、絶対的な創造主である神が万物にたいし至高の超越的な位置にすえられるが、ゲーテでは、その教えをうけいれながらも、人間と人間を包む生威力豊かな自然が前面に出ている。そして、被造物である大自然はまた神の懷にいわばすっぽりと抱きこまれ、人間は豊饒な生成的自然をとおして、結局は神のなかに安らいで抱擁されているのである。

このように、人間は、神 \parallel 自然ともいえる懷のなかで安らぐのであり、だからして、ゲーテの詩には、自然のなかにじっと清純に浸^{ひた}っていたいという思いがあちこちに溢れている。たとえば、「五月の歌」「秋思」「湖上にて」「旅びとの夜のうた」(Über allen Gipfeln……)などの数多くの詩に。また、ヘルダーリンの詩のなかにも自然へ寄せる美しいナイーブな詩情が漲っている。「自然にちかづく」(An die Natur)で、かれはうたう。

自然よ！ おんみの美の光を浴びて

労するまでもなく おのずからに

愛の威風ある果実のかずかずが実った

さながらアルカディアの収穫のように

あるいはまた、「少年の頃」(Da ich ein Knabe war……)にも、

わたしが少年だったころ

ある神が　しばしばわたしを

人間たちの喧噪と苔しとから救ってくれた

わたしは　安心しておとなしく

小さな森の花たちとたわむれ

空ゆくそよ風たちも

わたしと遊んでくれた

……

ざわめく森の

快い調べがわたしを育ててくれ

花たちのもとでわたしは

愛することを学んだ

神々の腕のなかでわたしは大きくなった

わたしは、ここで、ゲーテとヘルダーリンとのあいだの微妙な相異よりもむしろ、自然の大きな腕に抱かれ安堵して歎びにつつまれる両者の心情の同一性を思いたい。そして、さきにのべたように、われわれの東洋

とヨーロッパとのあいだの相異をあらためて思いながらも、また同時に、深く共感しうる人間的同一性を感じる。ゲーテとヘルダーリンはこうしてふたたびわれわれに近づくのである。

『詩の真実』のなかでも、たとえば第二部第九巻、美しいエルザスに旅してシュトラスブルクの名高い大聖堂^{ミンスター}の展望台から眺めた未知な自然の風光、また第十巻、ゼーゼンハイムの森と、「愛らしい」フリードリケの休み場から展ける美しいパノラマなどの描写から、ゲーテの若々しい溢れるような自然への詩情をやりわれわれは感じとることができる。

ゲーテにとっての自然は、いまみたように、神の懷に抱かれて一切を生み育てる母なる自然であり、その秩序とリズムをもつ周期性は、それを導く秘められたある深い摂理の存在をかれに思わせるのであった。それゆえに、自然宗教も、純朴な人々の胸におのずからに芽生えてくるものと、かれには信じられた。

ゲーテはまた、二十才に近い頃、かつてヴィンケルマンが足しげく通ったドレスデンの画廊を訪ね、イタリアの名画に接した頃のことを想起して次のように書いている。「どんな名画であっても、それを自然^{ナチュール}そのものとして眺め、それを自然^{ナチュール}の位置に置いて観、自分の熟知している自然の一部と比較してみることはできないものは、わたしのうえに何らのエフェクトをも及ぼすことができなかった」（上、五五二ページ）。詩人ゲーテにとって、このように、自然が、もちろん芸術の基礎であるが、同時に、このように自然と比較してみても、豊かな無限な力強さをもつ芸術の独自の価値を認めさせるような創造性に富む作品こそがめざされるのであり（それは結局、ミケランジェロ・システイナチャペルの天井画、あるいはプロメテウス^{プロメテウス}＝ファウスト的なものとなるだろう）、この意味で絵画についていえば、絵筆が自然に勝^{まさ}っている」（上、五四八ページ）のでなければならなかった。人間も当然また生命力に溢れる自然なのであり、詩人的才能としての内なる自然が外なる自然にたいして創造的に深く働き、しかもたがい共鳴しあうことによって、はじめてすぐれた力強い芸術品がうみだされるので

ある。

第四部第十六巻でかれは書く、「私はもう、自分の中にある詩人的才能をすっかり自然として観、そしてまた、外側の自然をこの「内なる」自然の対象として観るといふ風になっていた。この詩才の行使はもちろん外部からの誘因によってはじめて刺激され、規定されるのであったが、それが、もっとも豊かに喜ばしく表白されるのは、自分の意思を俟たないで、むしろ自分の意思に背いて働くとき〔そして即興的な作詩となつて溢れるとき〕であつた。

Durch Feld und Wald zu schweifen,

Mein Liedchen wegzupfeifen,

So ging's den ganzen Tag,

田園と森のなかを徘徊り歩くこと

自分の小歌を口吟むこと

それだけに一日中が過ぎていった」(下、五一—二ページ)。

だがまた、ゲーテはこのような即興的な作詩の場合ではなく、十分な構想のもとに成るロマンの創作の場合について、『ヴェルテル』の経験を想起して第三部十二巻で次のように書いている。「自分の内面に現れている自然をその特質のままに保ち、一方では外界の自然をしてその特質のままに自分のうへへ影響せしめたい。わたしのこうした主義は、わたしを駆って異様な雰囲気に入らしめ、そのなかである『ヴェルテル』を構想し、書きあげた。わたしは、対内的には自分の心の中からあらゆる自分にとっての異類な傾向や思想を駆除し、対外的には親愛の態度を以て一切の事々物々を観察し、人間から最下等の動物に至るまでのあらゆる生物をして、いやしくもそれが自分の理解に入る以上は、自分のうへへそれぞれの特殊な働きを及ぼさせることにした。

で、そのために生じたのは、自然界の個々の物象〔対象〕との不可思議の親和（Verwandschaft）、自然全体との内心的共鳴と和諧（ein inniges Anklängen, ein Mitstimmen der Natur）に於いた」（下、二六五ページ）。ゲーテは、ここで、創作にあたっての、外的対象（外界の広義な自然）についての周到な観察・分析と、それをおしてのそれらの事物の自分へ及ぼす働き、その結果もたらされる内外の両自然の媒介的な統一について書いている。詩人は、対象に向かいながら同時に対象からはらきを主体的にうけとるのであり、それによって、自分（主体）の対象との深い親和、自然全体との内面的共鳴・和諧、新しい次元での生成力・創造力の高揚が達成される。ここで注意すべきことは、ゲーテはたんなる主客合一、すなわちいわゆる神秘的な仕方での主体・客体の区別の滅却をいうのではなく、反対に、どこまでも芸術家の眼をもってしかと対象を観す、対象へと迫り、そうすることによってはじめて迫真的な、主体的な、精神の高揚した表現が作品として結実するということである。こういう考え方のうえに立って、ゲーテは自分の詩作のめざすのは、「自然的なもの、真実のもの（das Natürliche, das Wahre）」（上、五〇八ページ）を描きだすことにあるというのである。

第十二巻からのこのような引用の少しあとで、ゲーテは、自然によせるひたむきなかれ自身の観察の眼について次のように書いている。「わたしは自然のうえへ、画家としての眼と詩人としての眼とを併せ注いだ。ことにわたしが好んで足を運んだのは、爽やかに活々として流れる小河の畔と、その前後に展けている美しい「ゼーゼンハイム」の田舎であった。その眺望はわたしの孤独癖をいっそう募らせ、わたしをして存分に瞑想を味わわしめ、自然界の一切のものに向けられた沈黙裡の観察に耽らしめた」（下、二六六ページ）。

これまでわたくしが書いてきたことの結びにゲーテの「芸術家の夕の歌」と題する詩の数節をみよう。

ああ
内なる創造の力が

わたしの心をつらぬいて鳴りいで
精気あふれる形成の果実が

わたしの指のあいだから迸りでよ！

……

自然よ わたしは何と憧れていることか

誠と愛をこめておんみを切に感じとりたいと！

おんみは 喜ばしい噴泉となって

百千の管をとおして湧きめぐるだろう

わたしの心のうちのおんみのすべての力を

おんみはわたしのために爽やかに生気づけ

わたしのこの狭い現存在を

永遠性にまで おし拡げるだろう

5

前節でわたくしは、詩作における外的・内的の両自然の共鳴と諧和、高次な詩的な昂揚（Erhabenheit）へと論をすすめたので、ここであらためて、詩作についてのゲーテの思想をみることにしよう。

ゲーテは、芸術においてアルファにしてオメガであるのは、作品の内包する内面的実質であると考ええる。これは次のように書く、「或る題材が詩として作りあげられたとすれば、その内面的実質 (der innere Gehalt)こそ芸術としての始めであり終わりである。………… 本当の文芸的作品は一つの価値のある題材に基づき、その扱い方は、技巧と苦心と錬磨とに依って、題材の意義をいっそう完全に顕著に感得せしめるという風にならなければならない」(上、四七四ページ)。作品は題材の含蓄する内面的実質を客観的に鮮明に開示するものでなければならず、題材についてただありきたりと思える雑多な事実を外面的に羅列することに墮してはならない。「すべての芸術は、外観 (Schein、あるいは仮象) によって、いっそう高い現実性 (Wirklichkeit) の幻惑 (Täuschung [錯覚]) を付与すべきで、この一事がその最高使命である」(下、一六六ページ)と云々いう。「芸術的真実 (das Kunstwahre)」(下、一六七ページ)こそが詩人によって追究さるべき目的であり、これにたいし、一つひとつとしては真であらうけれども——しかし全体としては隠蔽もありうるし、その場合にはすでに事実レベルでも偽でありうる——、そのようなものは科学的真理とはいえないのはもちろんのこと、とうてい芸術的真実ではありえない。これはひじょうに重要なことである、とわたくしは思う。

* ここでゲーテはヴィルクリッヒカイト (Wirklichkeit) という。これはたんにリアル (リアル) というのとはちがう。ヘーゲルの用語と思想に近づいているといえよう。それは事柄の内的真実、深い本質性、必然性、それゆえ、普遍的の具現として、たんなる実在 (Realität) とは区別される。

ところで、ゲーテによれば、おなじく芸術といっても、詩作 (言語芸術) と造形芸術 (建築、彫刻、絵画) とは、異なっている。すなわちレッシングが『ラオコーン』で明らかにしたように、両者は、根底においてはどれほど密接しようとも、頂上では分かれている。造形芸術家は美によってのみ満足する外的感覚に働きかけるのであり、美の範囲内に止まっていなければならない。これにたいし、言語芸術家はあらゆる種類の概

念を必要とするから、美の範囲外に逸出することも許されている。かれは想像力に訴えるのであって、想像力は醜いものをも甘んじ容れられることができるのである。ここに滑稽美の領域が成立する。

* ゲーテはここではこのように書いているが、わたくしは想像力は造形美術でも必要であると考えている。ゲーテも造形芸術をあらためて論ずれば、詩の場合との相違はあるにせよ、このことを認めるのではなからうか。

ゲーテは想像力を人間にとって、したがってまた詩にとって、ひじょうに重要な、いや不可欠なものと考えている。第二部の終わりの方でかれは次のように書いている、「われわれの願望なるものは、われわれのうちに存する能力の予感であり、われわれが遂行しうべきものの先触れである。われわれのなしうるもの、為したく思うところのものは、われわれの想像力にたいして、われわれ以外に在るもの、未来のなかに望まれるものとして現れ、そこでわれわれが暗々裡に所有しているものにたいして一つの遙々とした憧れを感じるのである。それであるから、熱情的な先取は、事実^{ハルツ}に於て不可能なることをすらも夢の如き現実と思わせがちなものである」（上、六六三ページ）。つねに未来を望む何と力強い表現であろうか。想像力は、人間の行動一般についてはもちろんのこと、文学的創造においても、享受においても、つねに未来的、超越的で、やがて実現されてゆくべきはずのものを描きだす生成的な力として先導的な役割を果たすことを、ゲーテは強調するのである。

6

さいごに、第二部第九卷、シュトラスブルクの荘嚴な大聖堂の建築美についてのゲーテの考察について触れて本稿の結びとしよう。ここにかれの造形芸術についてのすぐれた審美的精神をみることができる。

ゲーテはこの大聖堂をはじめて仰ぎみた日に受けたまったく特異な強烈な印象を次のように書いている。

「この壮大な建物は（いきなり）一つの恐ろしい怪物として感じられる」、だが、それと「同時に、また一つの規則正しいもの（秩序を保つもの）」として会得され」たのであり、もしこのように「一つの完成されたものとして快い感じを起こさせることがなかったなら、（その恐ろしさのゆえに）わたしは驚き怯（おそ）えて逃げ出したかもしれないのであった」（上、六一三ページ）。では、それをその大聖堂の前にしばしひきとめた不可解な力は何であつたのか。その後、市中にいても市外にいても、この建築はたえずかれの眼の前に現れてきたが、やがてかれは次のような考えに達した。すなわち、「あの大寺院の前面をみればみるほど、前にいった（恐ろしさ）と規則つまり秩序性との混合といった」最初の印象、すなわち、それには「あらためていえば」莊嚴（あるいは崇高、das Erhabene）と快美（das Gefällige）とが結合されているという感じをいっそう多く強められた。或る異常に巨大なものが一つの全体として仰がれた場合に、それが我々に恐怖を起こさせないためには、……それはぜひとも、一つの不自然な、一見不可能と思われるような結合をもつて現れなければならない。すなわち快美な分子（das Angenehme）がこれに付け加らなければならない。われわれがあの大寺院の印象について語りうるのは、いまいった巨大美と快美とのあいりれない「矛盾した」両性質が結合されているとみただけの場合にのみでいうことであるから、この点からしても、われわれがこの古い建物にどれほどの高い価値を認めなければならぬかが判るであろう」（六五六ページ）。

しかも、この大聖堂は、全体がたしかに嚴肅な堂々としたものにみえるとともに、そのすべての部分が、ほどこされている装飾によってそれ自身として、しかも装飾があたかもその部分から生じてきたものであるかのように、十分に顕著な特色をもちながら、相互にみごとに適合しあっていることが注目される。ゲーテは、「斯様な整然たる（質的でもあるおのずからの）多相はすべて至当という觀念に発するものであり、ゆえにまた、同時に統一という感じをも起こさせるから、したがっていつでも大きな快感（芸術作品による感銘としての快

(*höher*)」を与えずにはおかない。全体の完成が美術の絶頂として讃えられるのも、かような場合にのみ限られたことである」(上、六五九ページ)。

わたくしはここにゲーテの建築美についての並々ならぬ洞察力をみる事ができると思う。かれは、荘厳と快美との、あるいは崇高と美との、いわば矛盾しあう統一の(地上で可能なかぎりでの)完璧な実現をその建築のうちにみてこれを讃えるのである。

* ゲーテは「ドイツの建築術について」と題する論文のなかで、この大聖堂のすばらしい芸術性を讃え、「神の樹々のように、完璧で偉大、しかも、もっとも小さな部分にいたるまで必然的に美しい」(*ganz, groß und bis in den kleinsten Teil notwendig schön, wie Bäume Gottes*, 前掲『若きゲーテ研究』一八五ページ)と書いてゐる。

ゲーテの『詩と真実』は一つの精神的な宝庫として尽みつくせない魅力をもっている。本稿ではただいくつかの点について触れたにとどまる。

